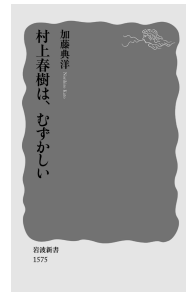




# 『村上春樹は、むずかしい』

加藤典洋著  
岩波新書 800円＋税



そもそもが「『離れ』という言い回し自体がものごとを一面的に、誤った光の当て方をしているだけのように思われることが少なくない。

「活字離れ」「文学離れ」などが典型であるが、私の見たところでは、逆である。むしろ世の中はいっそう文学的情緒に溢れているし、何より誰もが自分にあふわしい内面的な言語を必要としているように思われる。

ノーベル賞の季節がくると、何となく文学賞のゆくえが気になるというのは潜在的にはそのような事情もあるのだろうかと思像する。

日本で毎年受賞予想の上位にくるのは村上春樹である。たえて国民小説という言い方がなされなくなつた現在にもかかわらず、次作を世界の読者が待ち受けているという希有の日本人作家なのは間違いない。

現役中の現役の作家ながら

も、世の中にはいろいろな村上春樹論が溢れている。なかでも、最も鋭い切り口で、しかもたんなる文学論を超えた妙味を与えてくれる思想家が加藤典洋氏による本書である。タイトルに謳われているのが決して偽りでないのは数ページ

めくるとわかる。

というのも、たぶん私たちは村上春樹という作家に対して、(読んだ人もそうでない人も)不思議なほど軽い印象を抱きがちである。あえてそれを逆から読むとここまで深みがあるのだということをしていねいに教えようとしてくれている。

というのも、村上は、芥川賞や直木賞など日本の文壇の大き

## 本格的な現代作家論

な賞を受賞していない。というか、日本の文壇と交流さえ持つていない。現代作家のなかで、村上自身が影響関係を明言するものはほとんどない。その意味では、村上は「文学業界」から意識的にデタッチメントすることによって、自らの作風を創造してきた作家である。そのようなこともあって、外面的には日本文学史のなかで村上を直接的に位置付けるのはとてもむずかしい。

そんな村上の創作の初期から現在にいたる約30年間を的確に考察の射程に収めたのが本書である。村上の入門書としてはやはりレベルは高いけれども、ある程度世界に親しみを持つ人にとってはまっすぐに入っていき

るものがある。わけても、村上の作品とともに年を重ねてきた年代の方などは、そのことが顕著に言えるか

もしれない。私などはいぶ遅いほうに属すると思われるが、95年の阪神淡路大震災やオウム事件の近辺から、村上の作家としての活動が広がり、自覚を伴うようになったあたりの分析はとても心にふれるところが多かったように思う。

少なくとも、村上春樹は現代の日本人作家として、おそらくただ一人、近い将来ノーベル賞を受けられる可能性のある作家としてよいかもしれない(ほかにいたら申し訳ないのだが)。

去年はポップ・デザインが受賞したことで世間の驚きを呼んだものであるが、そうでなくともネットなどを見る限り文学というものの容器が多様化しつつあるし、一義的に狭い枠組みに閉じ込めるのは無意味になつていくように感じる。

村上作品をていねいに読むことはもしかすると現代という時代の核にふれる行為なのかもしれない。